

幼児への発声指導の実践と考察 — 頭声発声の有用性に着目して —

長 川 慶

岐阜聖徳学園大学短期大学部

Practice and consideration of teaching vocalization to infants: Focusing on the usefulness of head voice

Kei Nagakawa

キーワード：領域「表現」 歌唱活動 発声法 指導方法 幼児

I. 序論

参観や実習訪問などで幼稚園、保育所を訪れると、子どもたちが元気に歌う姿をしばしば目にし、園生活と歌唱活動が密接に結びついている様子が見て取れる。しかし、その歌声はともすると怒鳴り声に近いことも珍しくなく、また保育者や周囲の大人の多くが、子どもたちが元気いっぱい歌う姿は育ちゆくエネルギーそのものであり、“元気な”姿としてとらえているようにも見える。

日本人は、とにかく大声を好む国民性がある。球技を中心とした体育系の部活動で大きな声を出すように繰り返し指導を受けることや、居酒屋などでまさに怒鳴るような大声で接客をする姿が見受けられるのは、まさにその証左と言える。

大声を好むのは、大人に限った話ではない。子どもも同様に大声を好むことは、大場¹⁾、大畑²⁾が指摘しているのをはじめ、筆者が行っている保育者との意見交換の場でも、「子どもはそもそも大声で思い切り歌うことが好きだ」という意見は複数の保育者から聞かれた。さらに羽仁は、日本人の子どもは、周囲の大声で話す大人や、無尽蔵に街にあふれる宣伝や音楽などの音環境に影響され、突如として怒鳴ったり、大声ではしゃぐのだと指摘し、また周囲の大人がそのような子どもの姿を見て、子どもと怒鳴ることは一体なのだと認識していると述べている³⁾。つまり、日本には大人も子どもも大声をあげやすい社会環境が存在し、大声を出すことが“元気があって好ましいこと”として認識される素地があると考ええる。

確かに、このような社会環境的要因から考えれば、子どもが最大限に声を張り上げて歌う姿は、ある種の“子どもらしさ”や“元気”を感じさせるものであろう。しかし、保育現場の歌唱活動において、子どもたちの大声で怒鳴るような歌声は、けっして容認されるべきではないと考える。大声で怒鳴るように歌唱活動を行うことは、子どもたちに様々な弊害をもたらすからである。

怒鳴るような歌声がもたらす弊害として、まず考えられるのが音声障害である。思春期以下の子どもは、声帯粘膜固有層の層構造が完成しておらず、特に5歳以下の幼児では浅層の構造が未分化なため、小児の声帯は過度の刺激に対する抵抗力が弱く、傷つきやすいとされている⁴⁾。また、子どもの声帯は未発達のため小さく、その分声が高くなる。声が高いことは声帯の振動数が多いことであり、その分機械的刺激が多くなり、声帯に結節が生じやすい⁵⁾。そもそも、保育現場では子どもの安全や健康に配慮することが幼稚園教育要領⁶⁾や保育所保育指針⁷⁾等に明示されているにもかかわらず、子どもの声の安全について無頓着であることは大きな問題と考える。幼児の“声の衛生”という観点から、怒鳴り声は早急に解決されなければならない課題である。

2点目の観点は、教育目標の達成が困難となることである。保育現場の歌唱活動を、「音楽」あるいは領域「表現」としてとらえた時、怒鳴り声のまま歌唱することは、そのねらいの達成が極めて難しくなる。領域「表現」では、ねらいを「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする⁸⁾⁹⁾」としている。叫ぶような歌声では、メロディーや歌詞に込められた心情、とくに優しさや悲しさ、寂しさなど、心の機微に触れるような情感に気づい

たり、表現したりすることは不可能である。また、叫ぶことで音程を失い、正しい音感が身につかないことも危惧される。

したがって、保育現場での歌唱活動では、子どもの歌声について、細心の注意を払わなければならないと考えるのである。

子どもたちの怒鳴るような歌声を解消していくためには、発声指導がなにより重要である。特に子どもたちの“大きな声で歌いたい”という欲求を満たしながら、怒鳴り声を解消していくためには、裏声を中心とした頭声発声が非常に有効であると考え（発声方法についての項参照）。

筆者は小学校勤務時代に、児童に対し頭声発声を中心とした歌唱指導を行い、その成果を実感し、「児童に対する発声指導についての一考察 — 基本となる発声についての考え方とその指導法 —」としてまとめた¹⁰⁾。しかし、就学前の幼児に裏声を使って歌うという概念を理解させることは可能なのか、また、そのような発声指導に対して子どもたちは喜びをもって歌唱活動を行えるのかなど、想定される課題については未知数であった。よって、これらの検証を行うため、小学校における指導法をベースに、保育現場で実験的に発声指導を試みた。

本稿では、実際の指導の結果に基づき、特に下記の3項目について考察を行い、今後の幼児への発声指導への一助としたい。また、子どもの実態や指導に対する具体的な反応などは、保育者養成校の授業においても貴重な基礎資料となるものである。より実践的な授業への改善にむけ、本研究を役立てていきたいと考える。

検証項目

- ① 幼児が頭声発声のベースとなる裏声を出せるか。
- ② 裏声（頭声発声）を用いて歌うことができるか。
- ③ 頭声発声を身につける練習を楽しみながら行うことができるか。

Ⅱ. 実践方法

実践①

対称：私立A保育園（新潟県）
年齢：4歳児（年中）
人数：18名
日時：2015年12月4日
11：00より30分間程度

実践②

対称：私立B幼稚園（新潟県）
年齢：4歳児、5歳児（年中、年長）
人数：各学年90名 計180名
日時：2017年5月2日
14：00より各30分間程度
備考：指導は各学年別、合計2回

1. 使用教材曲

勇気100%（作詞：松井五郎 作曲：馬飼野康二）
調性：ハ長調

今回の実験においては、2回とも馬飼野康二作曲「勇気100%」を使用した。

この曲は、山場でもあるリフレインの部分が楽譜1のようにMi4で音が繰り返される。Mi4は、子どもにとって通常の話声で歌うことが困難な音高であり、裏声（頭声）で歌わざるをえない。さらには、ワンフレーズがLa3からMi4までと音の上下動が少なく、裏声（頭声）だけで歌え、地声と裏声の換声の必要がなく、頭声発声を覚えるのに非常に適しているからである。

また、この曲はNHKの「忍たま乱太郎」のオープニングのテーマ曲となっており、子どもたちにとって非常に馴染みが深く、メロディーなどを改めて覚える必要がない。また、多くの子どもたちが好きな曲でもあり、楽しみながら歌えることも大きなメリットであることから選定した。

2. 発声方法について

変声期前の子どもの発声指導を考えると、裏声を中心とした頭声発声を用いるのか、話声（地声）を中心とした胸声発声を用いるのかが最初の出発点となる。頭声発声と胸声発声では声の出し方から訓練方法まで大きく異なるからである。

今回の発声指導では、裏声を中心とした頭声発声を用いた。現在保育現場では、胸声発声で歌唱活動が行われる場合がほとんどである（保育者養成校在学学生への聞き取り調査から：表1参照）。その意味では、胸声発声を用いた指導を試みるのがより現場の実態に即した研究と言える。しかし、頭声発声を選択したのは、幼児の怒鳴るような歌声を解消していくためには、頭声発声の方がより効果的であると考えからである。

序論で述べたように、保育現場での歌唱活動は、声の衛生という観点と、教育目標を達成するという観点から、怒鳴り声を解消していかなくてはならない。しかし、ただ子どもたちの声量を抑え、小さく、優しく歌えと言うだけでは、子どもたちが歌うことそのものを、難しく窮屈に感じる恐れがある。思い切り、のびのびと歌いながらも、美しい響きや、やわらかな歌声を保持するという、相反する命題を解決しなければならない。この点で、頭声発声は非常に適していると言える。

品川は、低い音高から順に高い音高に歌っていき、実声（胸声）で限界となる点（音）を“大転換点（the Great Break）”と呼び、大転換点から下の声は声帯のすべての部分の振動を使って歌っており、大転換点から上の音は声帯の一部分の振動を使って歌っていると解説している。そして大転換点から下の音域を胸声区、上の音域を頭声区と定義している¹¹⁾。つまり、頭声発声は声帯の一部のみを使って発声を行うため、声帯への刺激が少なく、声を痛める可能性が低い¹²⁾。

逆に、胸声発声を用い、声帯のすべての振動を使ったまま歌った場合は、出せる音域の範囲内にとどまっている限り問題はない。しかし、高音域の出ない音を無理に出そうとすると、声の美しさが壊され平坦になり、きしんだ声¹³⁾になるだけでなく、無理をして高音域を歌い続けると、声帯の慢性肥厚を起こし、生涯にわたり取り返しのつかない重大な障害を受けると指摘されている¹⁴⁾。

筆者が小学校勤務時代に、子どもたちに発声指導を行った際、「大きな声」や「元気な声」を求めると、胸声発声の場合はすぐに怒鳴り声になってしまうのに対し、頭声発声（頭声区の音域）で歌っている限りは、どんなに大きな声を出そうとしても、怒鳴り声にならないことに気が付いた。これは、前述の通り頭声発声は声帯の一部のみを使って歌っているためと考えられるが、大きな声で歌いたいと願っている子どもたちにとってはその願いを叶えながらも、怒鳴り声にならないという点で、非常に優れた発声方法と言える。

さらにもう一つ大きな利点として、高音域を楽に歌えることが挙げられる。ガルシアは、子どもの初期の胸声区の音域はDo3~Sol3くらいまで、成長に従いDo4~Do#4まで広がるとしている。しかし、これに裏声（頭声）を合わせると、出せる声の上限をSol4~La4まで得ることができ、さらに丸く柔らかく、澄んだ響きの声になると述べている¹⁵⁾。楽に、そして美しい高音を出すことができれば、声帯の保護だけでなく、繊細な表現も可能となり、まさに一石二鳥の発声法である。

しかし、万能に思える頭声発声にも、欠点は存在する。

まず挙げられるのは、指導者側にある程度の知識が必要とされる点である。子どもは日常的に、胸声発声時に使う声帯内筋（胸声筋）を使って会話しており、前筋（頭声筋）を使った裏声は全く別の感覚となる¹⁶⁾。裏声（頭声）を用い歌唱活動を行っていくためには、その指導法を知らなければならない。指導方法自体は、一定の手順で行えば決して複雑なものではなく、声楽などの高度な専門的知識がなくても十分に実践できるものである。しかし指導のノウハウと併せて、頭声発声の歌声とはどのようなものなのかを知り、理想とする歌声の明確なイメージを持つこと、そしてそれを聴き分ける耳のトレーニングは必要不可欠である。

また、もう一つの欠点として、頭声発声の歌声に響きがつき、音色、音量ともにある程度形になるまで時間がかかる点がある。特に最初期は、それまで胸声発声で“元気に”歌っているほど、声量がなくなり、非常に貧弱な歌声になったように感じられるだろう。先に述べたように、日本人は大声を愛する国民性があり、歌そのものよりも、大きな声が出ているかどうかを“成長の証”と考える保護者も少なくないと推察する。頭声発声に取り組むには、指導する保育者だけでなく、園全体、場合によっては保護者の理解も必要となるなど、大きな援助が必要となることも考えられる。

さらには、現在市販されている曲の中心の音高は、胸声発声でしか出せない音も多く含まれているため、胸声発声と頭声発声をつなげる訓練を行わなければならない。しかし、このような歌唱指導のあり方を、“教え込み”や“子どもの自由な発想を奪う教育方法”であるとして、否定的な意見もあるだろう。また、頭声発声で歌う幼児たちの歌声を“子どもらしさを感じない”とする指摘¹⁷⁾もある。

しかしながら、欠点については、周囲の理解と丁寧な指導で克服できる課題であり、また、教育・保育的視点から考えても、頭声発声はよりメリットが大きい。したがって、頭声発声は、今後積極的に保育現場に導入されるべきであると考えているが、様々な見解も考慮しながら議論を深め、さらなる考察を行いたい。

表1 保育者養成校在学学生への聞き取り調査

| 実習先幼稚園で頭声発声を用いて歌唱活動が行われていたかについての聞き取り調査 ※ | |
|--|------|
| 質問：実習先の園児は裏声（ファルセット）を用いて歌っていましたか？ | 回答者数 |
| 1. 歌っていなかった | 45人 |
| 2. 歌っていた | 3人 |
| ※ 聞き取り調査について ● 対象：G 大学短期大学部幼児教育科に在籍する学生（幼稚園実習終了直後） ● 人数：48名 ● 形式：選択方式のアンケート調査 ● 期間：平成29年6月、7月（2回に分け実施） ● 備考：頭声発声についての概念は、頭声発声を用いた歌唱指導で優れた実績のある大阪府吹田市の山田敬愛幼稚園の園児たちの歌声を聴いてもらい、判断材料とした。なお、使用した音源については、同幼稚園のホームページから聴取できるものを許可を得て使用した。（聴取日：2017年7月4日） | |

表2 頭声発声の利点と欠点¹⁸⁾

| 頭声発声のメリットとデメリット | |
|----------------------|----------------------|
| 利点 | 欠点 |
| 音域が広がる | 中音、低音が出しづらい |
| 響きを感じやすい | 初期に声量が少なくなる（ように聞こえる） |
| 音色のばらつきが少ない | |
| 怒鳴れない、叫べない | ある程度の声量が出るまで時間がかかる |
| 声への負担の軽減 | |
| 音痴の矯正 | |
| (変声期にさしかかった声への負担の軽減) | |

Ⅲ. 実践内容と結果

今回検証するのは、第1回目としてA保育園にて行った発声指導と、第1回目の反省と考察を基に行ったB幼稚園での発声指導の2回である。

指導対象は、A保育園では4歳児（年中）クラス、B幼稚園では4歳児（年中）クラスと5歳児（年長）クラスで指導を行った。本来は同一の園、同一のクラスで複数回指導を実施するのが理想であるが、都合上時間が取れず、やむなく別の園での実施となった。なお、A保育園、B幼稚園ともに、指導を実施した段階では、頭声発声を用いた歌唱活動は行われていなかった。

今回の指導上の最も重要なねらいは、頭声発声の基本となる裏声の感覚をつかませ、それを歌唱に反映させることである。

1. 指導第1回目

第1回目の指導は、表3の手順の予定で行った。（表3参照）

そう さ ひゃくパーセントゆ うき もう がんばる し かな いさ

楽譜1 「勇気100%」リフレイン部分

表3の手順は、筆者が小学校の授業において、教材曲も含めて発声指導の第1回目の授業で取り入れていた方法である。小学校では、この方法で1年生から6年生まで指導を行い、児童たちは学年を問わず、20～30分という比較的短時間で頭声発声で歌う感覚をつかむことができた。

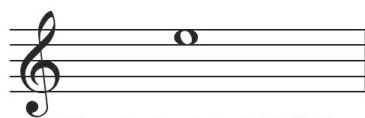
また児童たちは、楽譜2のように高い声（裏声）で“おはようございまーす”とあいさつするのが楽しいらしく、学年や学校を問わず、授業後には裏声で“ありがとうございましたー”や“さようならー”とあいさつして帰る子どもや、いろいろな言葉を裏声で言う声が廊下から聞こえてきた。

このような事例から、あいさつを歌につなげる活動は子どもたちにとって一種の“あそび”になると考え、A保育園でも実践してみることにした。



おはようございまーす

楽譜2 Mi4でのあいさつする



ひゃくパーセントゆうきー

楽譜3 Mi4で歌詞を言う

しかしながら、保育園での実際の指導では、小学校の授業と同様には進まなかった。まず、活動のもっとも重要な部分である、楽譜2のあいさつがスムーズに行かなかった。裏声は出せるものの、全員で同じ高さの音（Mi4）であいさつをするということが非常に難しかった。Mi4は楽譜1の“ひゃくパーセント”の部分の音高と同じ高さである。あいさつの段階で同じ音に揃えておくことは、実際の歌唱に移行する際にあいさつと同じ感覚で歌い出せるため、大変重要である。小学校ではピアノでMi4の音を弾きながら、3、4回あいさつをしていれば、ほぼ全員が裏声でMi4の音に合わせられるのだが、保育園ではむしろMi4の高さに合わせられる子どもの方が希少で、残りの子どもは裏声ではあるものの、それぞれが好きな高さでのあいさつとなった。前述のように、Mi4の音高に合わせることは、次のステップにとって大変重要である。したがって10回近くあいさつを行ってみたものの、Mi4の高さであいさつができた子どもは、多く見積もっても約半数といったところであった。

この後残りの手順も表3の要領で行っていったが、リフレインの部分で“さっきあいさつした高い声で”と指示すると、音の高さの認識が不安定であったためか、Mi4の1オクターブ上の音で歌おうとする子どもが出てきたりと、想定していなかった問題に直面することとなった。さらには、実際の歌唱に移るころには子どもたちが飽きてしまい、集中力が低下した状態となってしまった。“歌じゃなくてなぞなぞがしたい”、“先生のネクタイピンをさわってみたい”など、いろいろなリクエストが出る中、“じゃあ、この部分を上手に歌えたらなぞなぞをしようか”など、なんとか歌わせるように試みたものの、結果的に指導としては大失敗であり、小学校における指導手順では上手くいかないことがわかった。

2. 指導第2回目

第2回目の指導では、前回の反省を取り入れ、前回の手順（裏声を認識させる部分）を全面的に改め、“声を使った遊び”を導入した（表4参照）。方法は、サイレンを真似する遊びで、低い声（胸声）から、サイレンのように急激にグリッサンドで高い声までの登り降りを繰り返す。

この方法のメリットは、低い声から急激に高い声に移行すると、自然と裏声になりやすい点である。特に、「どこまで高い声を出せるかな?」、「今よりさらに高い声を出してみよう」などの言葉がけは、競争や挑戦が子どもたちに生まれ、より確実に裏声を出させるには非常に有効であると感じた。また、楽しそうにサイレンの真似をしている子どもたちの様子をはじめ、別の部屋にいた2歳児のクラスでも、聞こえてくるサイレンの遊びを聞いて真似する子どももいたとの話もあり、子どもたちにとっては楽しい“あそび”となっている様子がうかがえた。

実際の歌唱においても、年中、年長クラスともに大きく音を外したり、地声のままの子どもはほとんどなく、リフレインの部分（楽譜1）を頭声発声で歌うことができた。この点は、第1回目の指導よりはスムーズであった。しかし、2回目の指導は1回目とは異なる園、人数であったため、この点については1回目の園、もしくは同規模の人数での再検証が必要と考える。また、2回目の指導でも、曲の冒頭から歌っていくと、リフレインの部分でうまく頭声に切り替えられる子どもは少数であり、胸声から頭声への換声については、時間をかけて丁寧に指導する必要があると感じた。

表3 第1回目指導時の手順

| 指導手順（第1回目：A 保育園） | | | |
|------------------|--|---|---|
| | ねらい | 指導内容 | 学習活動 |
| 1 | <ul style="list-style-type: none"> ● 通常の話声を認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 通常の話声で（普段通り）“おはようございます”と何回かあいさつを行うことにより通常の話声を認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者のあいさつに応答し、あいさつを返す |
| 2 | <ul style="list-style-type: none"> ● Mi4の音を裏声で出すことを認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜2の要領で、Mi4の高さであいさつをして、裏声の手本を示す | <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者の手本を聴き、ピアノのMi4の音に合わせながら、楽譜2のようにあいさつをする |
| 3 | <ul style="list-style-type: none"> ● Mi4の音を裏声で出すことを体感させる ● “おはようございます”の“ま”の部分をのびしながらあいさつさせることで、裏声で歌う感覚を認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● “おはようございます”の“ま”の部分を伸ばしながらあいさつをさせ、裏声を体感させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 全員で楽譜2のようにMi4の音高で、“おはようございます”の“ま”の部分をのびながら、あいさつをする（指導者の真似をする） |
| 4 | <ul style="list-style-type: none"> ● 実際に裏声を使つての歌唱に向けて、歌詞を裏声で言わせ、裏声を再認識させる ● リフレイン部分を裏声で言えるようにする ● Mi4は楽譜1の“ひゃくパーセント”の部分と同じ高さの音であり、裏声で実際に歌唱する時に、あいさつと同じ感覚で歌いだせるようにする | <ul style="list-style-type: none"> ● 同じ要領で、リフレインの歌詞である“100%勇気”をMi4の高さで言わせる（楽譜3参照） | <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者の手本を聴き、全員で楽譜3のようにMi4の音高で“100%勇気”を言う |
| 5 | <ul style="list-style-type: none"> ● 裏声のみで歌い、頭声発声で歌う感覚を身につける | <ul style="list-style-type: none"> ● 裏声のみで“ひゃくパーセント”から4小節歌わせる（楽譜1参照） | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の“ひゃくパーセント”の部分から、“がんばるしかないさ”までを歌う |
| 6 | <ul style="list-style-type: none"> ● 裏声のみで歌い、感覚を身につける | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1から1番の終わりまで歌わせる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1から1番の終わりまで歌う |
| 7 | <ul style="list-style-type: none"> ● 出だしの部分の発声はどのようなものでも構わないが、楽譜1からは必ず頭声発声で歌う意識を再認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の4小節前から歌わせ、楽譜2の部分を頭声発声で歌わせる（スムーズに頭声発声で歌えた時はそのまま1番の終わりまで歌わせる） | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の4小節前から歌い、楽譜2の部分を頭声発声で歌う（うまくいったときはそのまま1番の終わりまで歌う） |
| 8 | <ul style="list-style-type: none"> ● 自分が出せない高さの音は、裏声を使って出すことをわからせる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の部分から頭声発声で歌うことを伝え、曲を冒頭から最後まで歌わせる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1からの部分を頭声発声で歌うことを意識して冒頭から全部歌う |

表4 第2回目指導時の手順

| 指導手順（第2回目：B幼稚園） | | | |
|-----------------|---|--|---|
| | ねらい | 指導内容 | 学習活動 |
| 1 | <ul style="list-style-type: none"> ● グリッサンドの上部と下部で声が地声と裏声の2種類に変化することを認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● サイレンのように声をグリッサンドで上下行させ、手本を示す ● グリッサンドの上部は裏声で出し、裏声を認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者の手本を聴き、真似る |
| 2 | <ul style="list-style-type: none"> ● 挑戦や競争の意識を持たせて高音部を出させることで、グリッサンドの上部がしっかり裏声になるようにする | <ul style="list-style-type: none"> ● どこまで高い声が出せるか、もっと高い音が出せないかを尋ねながら、裏声を交えてグリッサンドの手本をさらに示す | <ul style="list-style-type: none"> ● どこまで高い声が出せるかを、チャレンジしながらグリッサンドを行う |
| 3 | <ul style="list-style-type: none"> ● グリッサンドの高低を全員で合わせることによって、声の高低を明確に認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 手で円を描きながら上下動させ、指導者の手の動きに合わせてグリッサンドをするように指示する | <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者の手の動きに合わせてグリッサンドを行う |
| 4 | <ul style="list-style-type: none"> ● グリッサンドの高音部をのばすことで、高音部での裏声をより明確に認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 手の動きを円の頂上部で止め、高音部（裏声）を長くのばさせる | <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者の手の動きに合わせてグリッサンドを行い、高音部で声をのばす |
| 5 | <ul style="list-style-type: none"> ● 実際に裏声を使つての歌唱に向けて、歌詞を裏声で言わせ、裏声を再認識させる ● リフレイン部分を裏声で言えるようにする | <ul style="list-style-type: none"> ● 手を最下部から動かし、円の頂上部で止めた時に、裏声で“ひやくパーセント”ゆうきー”と言わせる（楽譜3の要領で） | <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者の手に合わせて、最下部からグリッサンドを行い、手が円の頂上部で止まった時に、裏声で“ひやくパーセント”ゆうきー”と言う（楽譜3の要領で） |
| 6 | <ul style="list-style-type: none"> ● 裏声のみで歌い、頭声発声で歌う感覚を身につける | <ul style="list-style-type: none"> ● 裏声のみで“ひやくパーセント”から4小節歌わせる（楽譜1参照） | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の“ひやくパーセント”の部分から、“がんばるしかないさ”までを歌う |
| 7 | <ul style="list-style-type: none"> ● 裏声のみで歌い、感覚を身につける | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1から1番の終わりまで歌わせる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1から1番の終わりまで歌う |
| 8 | <ul style="list-style-type: none"> ● 出だしの部分の発声はどのようなものでも構わないが、楽譜2からは必ず頭声発声で歌う意識を再認識させる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の4小節前から歌わせ、楽譜2の部分を頭声発声で歌わせる（スムーズに頭声発声で歌えた時はそのまま1番の終わりまで歌わせる） | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の4小節前から歌い、楽譜2の部分を頭声発声で歌う（うまくいったときはそのまま1番の終わりまで歌う） |
| 9 | <ul style="list-style-type: none"> ● 自分が出せない高さの音は、裏声を使って出すことをわからせる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1の部分から頭声発声で歌うことを伝え、曲を冒頭から最後まで歌わせる | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽譜1からの部分を頭声発声で歌うことを意識して冒頭から全部歌う |

IV. まとめ

2回の指導を通じて、今回の検証項目である3つの点については、以下のように整理できる。

まず、第1点目の、「幼児が頭声発声のベースとなる裏声を出せるか」ということについては、2回の指導ともに、子どもたちは裏声そのものは問題なく出すことができた。よって、可能であると結論付

ける。ただし、今回指導を行わなかった年少（3歳児）や、未満児については、今後検証が必要である。さらに、裏声を出すための“あそび”すなわち頭声発声で歌うための準備を何歳ころから始めるのが最善なのかについては、大変重要な課題であり、大きな研究の柱としたい。

2点目の「裏声（頭声発声）を用いて歌うことができるか」ということについては、1回の指導でもある程度歌えるようになったので、十分に可能であると考ええる。しかし、一定の音程で歌うこと、さらには胸声から頭声への換声をいかにスムーズに行うか等については、時間をかけ、繰り返しての指導や練習が必要となると予想される。楽しみながら、飽きずに練習できる指導計画が重要であると考ええる。第1回目の指導では、Mi4の高さであいさつを揃えることができなかったことが躓きの原因と考えられるが、Mi4の音に合わせられなかったのは発達によるものなのか、あるいは歌うことの経験不足に起因するものなのか、再度の調査が必要である。また、年少時（あるいはそれ以前）から、一つの音に声を合わせていくような遊びを続けていけば、年中や年長の頃には聞いた音をより正しく歌えるようになる。しかし、これは子どもの音感を鍛える話でもあり、そのような指導を行う余裕が現在の保育現場にあるのか、音楽家を養成するわけではない幼児教育で必ずしも必要な教育項目なのか、検討を行っていかなくてはならない。

最後の、「頭声発声を身につける練習を楽しみながら行うことができるか」ということについては、これも十分に可能であると結論づける。第2回目の指導の帰りがけ、何人かの子どもたちとすれ違った時、子どもたちは得意そうに頭声発声で「勇気100%」のリフレインの部分を書いてくれた。筆者にとっては、第2回目の指導が子どもたちにとって楽しい時間であったと実感した瞬間でもあった。

第2回目の指導で、子どもたちが楽しく学習できた背景には、遊びから歌唱活動に入ったことが大きいと考えられる。今後、より楽しく頭声発声を身につけることができる指導を工夫したい。

頭声発声は、美しい歌声を実現できる発声法である。美しい歌声は、子どもたちの表現を実現するための手段となり、土台となるものである。今後も、より豊かな表現活動の実現にむけて、さらなる研究を進めていきたい。

注・文献

- 1) 大場牧夫(1996)：表現原論 幼児の「あらわし」と領域「表現」, 萌文書林, 東京, 106-107.
- 2) 大畑祥子 編(1991)：保育内容 音楽表現, 建帛社, 東京, 87-88.
- 3) 羽仁協子(1968)：子どもと音楽—正しい情操教育のあり方, 東京, 評論社, 東京, 116-122.
- 4) 苅安誠 編(2001)：「言語聴覚療法シリーズ14 音声障害」, 建帛社, 東京, 63.
- 5) 五十嵐隆 編(2011)：「小児科診療ピクシス27 耳・鼻・のど・いびき」, 中山書店, 東京, 150.
- 6) 文部科学省(2017)：幼稚園教育要領, 7.
- 7) 厚生労働省告示第百十七号(2017)：保育所保育指針, 50.
- 8) 文部科学省(2017)：幼稚園教育要領, 17.
- 9) 厚生労働省告示第百十七号(2017)：保育所保育指針, 45.
- 10) 長川慶(2013)：「児童に対する発声指導についての一考察—基本となる発声についての考え方とその指導法—」, 新潟中央短期大学紀要 暁星論叢 第63号, 79-108.
- 11) 品川三郎(1955)：「児童発声」, 音楽之友社, 東京, 26-29.
- 12) 蒲田典三郎(1983)：実践に即した歌唱指導の手引 指導者のための, 西六郷少年少女合唱団事務局, 東京, 71.
- 13) M・マルデ他著 小野ひとみ監訳(2010)：歌手ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと, 春秋社, 東京, 101.
- 14) 品川三郎(1955)：前掲書, 音楽之友社, 東京, 30.
- 15) Stefano Ginevra 編(2001)：Manuel Garcia Trattato complete dell'arte del canto in due parti, Giancarlo Zedde editore, Torino, 167.
- 16) 須永義雄(出版年不明)：声楽発声指導の基礎(講座用テキスト), 日本声楽発声学会, 26-27.
- 17) 名須川知子・高橋敏之 編著(2006)：保育内容「表現」論. ミネルヴァ書房, 京都, 52.
- 18) 長川慶(2013)：前掲書, 新潟中央短期大学紀要 暁星論叢 第63号, 89.